

気温上昇がイネ紋枯病の発病に与える影響

宮城県古川農業試験場 みやのりのちか 野法近

はじめに

宮城県における水稲生産は農業算出額の約4割を占め、畜産と並び中心的な役割を担っている。平成29年度は作付け面積66,300 ha、産出額771億円、全国6位と米どころ宮城として恥じぬ生産量である。水稲は様々な困難（気象、病害虫、雑草等々）を乗り越えて生産されるが、病害に着目した場合、重要な病害の一つとしてイネ紋枯病（病原：*Thanatephorus cucumeris*）が挙げられる（図-1）。水稲の病害で最も有名なものはイネいもち病ではあるが、本県での発生を見た場合、最も発生面積割合が高いのはイネ紋枯病となっている（図-2）。

本病は葉や葉鞘に周縁部が緑褐色ないし褐色で、内部は灰緑色ないし灰白色の楕円形の大きな病斑を生じ、病斑は下位葉鞘から現れはじめ、しだいに上位葉鞘に及び、激しいときには止葉の葉鞘や、葉あるいはみごまで侵される。発生程度によっては登熟不良や倒伏を引き起こし、品質、収量への影響が懸念される病害である。

おおむね宮城県では6月下旬から7月上旬に初発生が

見られ、7月下旬以降発生が増加する。本病の宮城県における防除は移植時の箱施用剤と、穂ばらみ期における茎葉散布剤を組合わせた防除体系を中心に行っている（図-3）。一方、近年地球温暖化が原因とされる気温の上昇が各地で報告されており、古川農業試験場のある宮城県大崎市のアメダスデータでは2000～09年10か年の平均気温が11.28℃であるのに対し、2010～19年10か年



図-1 イネ紋枯病の病徴

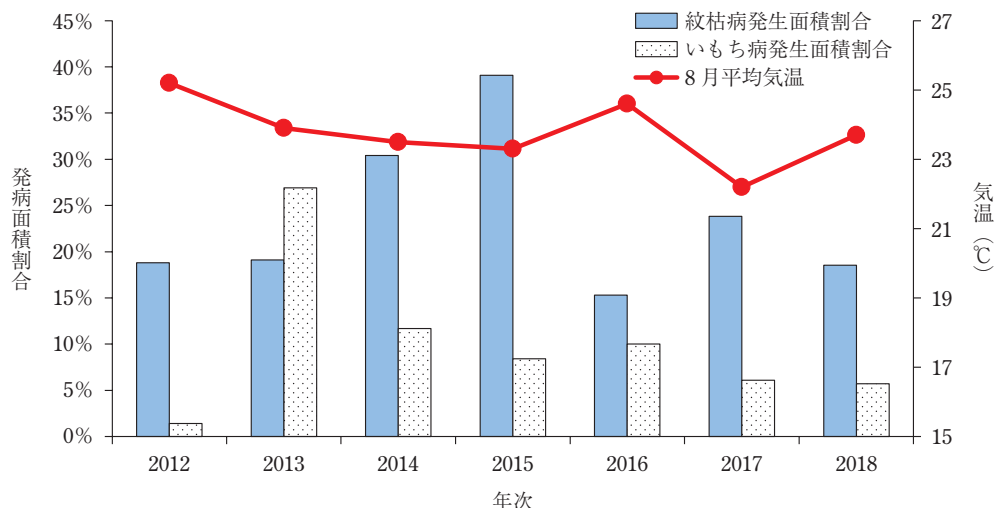


図-2 2012～18年の宮城県における各病害の発生面積割合と8月平均気温
※（平成30年度植物防疫年報：宮城県病害虫防除所発行より）

Effect of Rising Temperature Occurrence of Rice Sheath Blight.

By Norichika MIYANO

（キーワード：イネ紋枯病，気温上昇，初発前，箱施用剤）